

2025 年 4 月の総評に代えて 高橋修宏

あざらしの手つきで拍手する
きみのしゅくふくは
純白のこもれび

さいう（石川県）

「あざらし」に託した「拍手」の比喻が面白い。けっして慣習や義理などではなく、祝福の身ぶりがストレートに伝わってくるようだ。そんな瞬間を、穢れない「純白のこもれび」が受けとめている。

お祭りの屋台を解体するように
眠った むらさきいろの手招き

小池耕（東京都）

一行目「お祭り屋台を解体する」という、どこか大仰な比喻に驚かされた。その前には、何か目出たいことがあったようなイメージも伝わる。きっと「むらさきいろの手招き」には、悪夢など紛れこみそうもない。熟睡できそうだ。

その橋をわたりきれない声たちが
光るぶんまで手をふりたいよ

雲理そら（大阪府）

「わたりきれない声」とは死者か、難民か、あるいは単に届かない声か。象徴的な「橋」と相俟って、さまざまに想像させるが、二行目「光るぶんまで手を振りたいよ」という措辞から、哀しみと名づけてもよい感情さえ立ち上がる。

ことば未満の声を連れ足跡を
雪に残して飛び立った鳥

常田 瑛子（山口県）

一方、同じ声であっても、この「ことば未満の声」とは何なのだろう。「飛び立った

鳥」による人間の情緒などに還元しえない、かけがえのない何ものかなのだろうか。
「鳥」という存在の神秘性に触れるような一作。

巫女たちが一心に読むバーコード

桜庭 紀子（和歌山県）

何より、「巫女」という古代的な存在と「バーコード」との取り合わせが面白い。なるほど、今日の神社の光景としてありそうだが、「一心」と漢字表記にすることで、この一句にリアリティが宿ったのではないか。

心臓はみんな緋色で山躑躅

金光 舞（埼玉県）

血管を褒められてから菜種梅雨

檜野 美果子（宮城県）

どちらも身体、中でも臓器をキーモチーフとした俳句。表面から見えがたい身体の内
部を取り上げている点は共通するものの、その趣意は異なっている。金光さんの句は「心
臓」の比喻が「山躑躅」を呼び出すのに対し、檜野さんの句では時間経過の中で「菜種
梅雨」が呼び出されている。前者は季語のイメージの更新を迫るのに対し、後者では季語
の本意を活用している。この二者を並べ鑑賞することで、今日の季語に対するアプローチ
の両面がうかがえるようだ。

ことごとく雲逃げてゆき

晴天は

文字を抜かれた遺書に似ていた

石村 まい（兵庫県）

「文字を抜かれた遺書」という比喻に驚かされた。たしかに、雲ひとつない「晴天」は
気持ち良いという以上に、人によっては理由のない不安、さらには虚無を感じさせることも
あるのだ。

お絵かき帳の
結婚式の花嫁さんは二人
ママが二人いる子への憧れ

あゆな（群馬県）

子どもの「お絵かき帳」に託して、今という時代の断面を切り取っている作品。たしかに、子どもによっては「ママが二人」の方が良いと感じてしまうのだろう。その子にとって、もうパパなどいないのかもしれない。

こすれてはふくらむ
春の便箋に
ことばは小川の加速度をもつ

川上 真央（東京都）

微細な眼差しが光る一行目、そして三行目への飛躍が美しい。「便箋」という紙の物質感が、筆記する者の運動性へと転回しながら「小川」のイメージを現前させた。

いぬざくら貴種流離譚かもしれぬ

鶯浦 るか（富山県）

「いぬざくら」は、桜という言葉があっても全く別の植物。群生の白い花を咲かせる。おそらく作者は、その言葉の不可解な命名から発想したのかもしれない。「貴種流離譚」という措辞が、さまざまな想像をうながす。